氏名（本籍）	清水　美恵　（京都府）
学位の種類	博士（児童学）
学位記番号	博甲第 48 号
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 15 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当 児童学研究科　児童学専攻
論文題目	アレルギー疾患をもつ思春期にある子どものレジリエンス ―子どもを取り囲む重要他者への信頼感に注目して― Resilience in Adolescents with Allergic Diseases: Focusing on Trust in Significant Others
論文審査委員	主査　教授　　相良　順子 副査　教授　　原田　正平 副査　教授　　小野瀬　雅人

論文内容の要旨

【問題と目的】

レジリエンスとは，困難な出来事に遭遇したり，ストレスフルな状態を経験することによって精神的に傷ついても，それを乗り越え適応していくことができる個人の能力を指す。レジリエンスを高めることは，発達途上にある思春期の子どもに重要である。

思春期のこの時期は，対人関係や発達的変化など心理的問題が多く生じる時期である。特に，アレルギー疾患をもつ思春期の子どもは，病気と病気により引き起こされる二次障害によって不適応な心理的健康状態が生じやすい（赤坂, 2007）といった厳しい現状がある。そのようなストレスフルな経験にさらされ一時的に不安定な心理状態になっても，自身でそれを乗り越えて適応的な生活を維持するために，アレルギー疾患をもつ子どものレジリエンスを高めることが重要である。しかし，国内において，アレルギー疾患児のレジリエンス研究は見当たらない。アレルギー疾患児が自己管理を継続していく支援に，レジリエンスを高める要因について検討する必要がある。

そこで本研究では，まず，思春期にある一般の中学生で対人関係に重きを置いた包括的なレジリエンス関連モデルを検証し，レジリエンスがどのように高められるか明らかにする。次に，対象を絞り，自分を健康でないと認識する中学生のレジリエンスは，ストレス反応にどのように影響するか明らかにする。アレルギー疾患も含めて自分を不健康であるととらえているなど，さまざまな健康状態を抱えて学校で生活する中学生は少なくないであろう。そのような自分を不健康と認識する子どものレジリエンスの効果をみてみたい。

さらに，半構造化面接によって，アレルギー疾患をもつ思春期の子どもは，どのような心理的葛藤を経験しているのか，それをどのように乗り越えてレジリエンスを育んでいるのかを明らかにする。以上を踏まえつつ，アレルギー疾患をもつ子どものレジリエンスはどのような構造をもつのかを明らかにし，一般の中学生のレジリエンス構造と比較することにより，レジリエンスがどのように高められるかを解明することを目的とする。

【研究の概要】

＜研究 1＞では、レジリエンスに影響を及ぼす要因として内的作業モデル（Internal Working Models ；以下 IWM と表記），家族関係，教師関係に注目し IWM はレジリエンスに及ぼす直接的な影響に加え，家族関係や教師関係を介した間接的な影響を及ぼすとともに，さらにレジリエンスは生活充実感と学業コンピテンスに影響を及ぼすというレジリエンス関連 モデルを検証することを第 1 の目的とした。中学 1 年生～3 年生 541 名（1 年生男子 100 名，女子 82 名，2 年生男子 81 名，女子 91 名，3 年生男子 96 名，女子 91 名を対象にレジリエンス関連モデルを検証するために共分散構造分析を行った。その結果，レジリエンス関連モデルの妥当性が示され，中学生の子どもの対人関係の良好さが レジリエンスを高め，さらに レジリエンスを介して，生活充実感と学業コンピテンスを促進させることが明らかにされた。第 2 の目的は，学年や性別で仮説モデル内のパス係数に違いが見られるかを検討することであった。多母集団同時分析の結果，学年および性別によるモデルの差異が確認された。3 年生において IWM から教師関係へのパスは有意ではなかったが，教師関係からレジリエンスへのパスは有意な関連が示された。内在化された IWM が安定でない場合，教師との良好な関係が得られる可能性が低いものの，IWM が不安定な子どものレジリエンスを高めるために，大人の子どもへの情緒的な安定が育まれる関わりが重要であることが示唆された。

＜研究 2＞では，＜研究 1＞と同じ対象者のうち自分を「健康でない」と認識している中学生に着目した。自分を「健康でない」と認識している中学生のストレス反応に対するレジリエンスの効果を確認するために，生活習慣を統制し，レジリエンスを従属変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果，レジリエンスの「楽観性」はストレス反応と有意な負の関係がみられた。自分を「健康でない」と認識する中学生の場合，逆境を経験しても物事を前向きにとらえられるよう支援していくことが重要であることが示唆された。

＜研究 3＞では，アトピー性皮膚炎，食物アレルギー，気管支喘息のうち一つあるいは複数を診断され，小児アレルギー外来を受診し，アレルギー疾患の治療を継続している小学 4 年生から中学 3 年生を対象に，半構造化面接を実施し，アレルギー疾患をもつ子どものレジリエンスの特徴を明らかにするために質的に分析を行った。分析の結果，【病気を受容できない自分】【親へ依存している】【将来への不安】【他者から理解されない】といった子どもの心理的葛藤の経験が明らかとなった。さらに，子どもは，このような葛藤の経験を乗り越え，【良好な対人関係を形成する】【支援を受ける】【病気の自己管理ができ

る】といったレジリエンスの特徴が示された。

＜研究 4＞では，アレルギー疾患（アトピー性皮膚炎，食物アレルギー，気管支喘息）をもつ思春期にある小学 4 年生から中学 3 年生の子どものレジリエンスの構造を明らかにすることを目的とした。レジリエンス尺度の確認的因子分析を行った結果，4 因子構造が確認され，なかでも第 4 因子である「意見有用性」は，他者からの助言を受容し，自己の思考判断に役立て適応に変えるということを表し，アレルギー疾患をもつ子どもに必要な独特のレジリエンス要素を示すことができた。さらに，子どもの家族，友人，教師，医師，看護師への信頼感を示す指標として，「相談できる」「支えてくれている」「説明してくれる」か，あるいは「協力してくれる」の 3 項目を用い，その評価の違いがレジリエンスに及ぼす影響を明らかにすることを目的に Kruskal-Wallis 検定および Mann-Whitney 検定を行った。その結果，アレルギー疾患をもつ子どもを囲むそれぞれの立場の者が，子どものレジリエンスを高める上で異なる働きをしていることが示された。

以上より，本研究のレジリエンスを高めるための包括的なレジリエンス関連モデルの実証的な解明は，レジリエンス研究に新たな知見が付加されたといえるだろう。また，中学生の心理的健康を支えるための重要な情報として，環境要因である対人関係の重要さを改めて指摘した点は，学校保健に貢献できるのではないかと考える。本研究は，病気と闘っている思春期患児の語りから，子どもの心理的葛藤の経験を見出し，アレルギー疾患の思春期患児がもつ独特のレジリエンスの特徴を解明した。さらに，質問紙調査によって，アレルギー疾患をもつ思春期患児のレジリエンス構造を明らかにし，患児の重要他者への信頼感における認識の評価の違いによって，レジリエンスに異なる働きをしていることを解明した。このようなアレルギー疾患児のレジリエンス研究は，本研究が初めての試みであり，小児看護の実践，研究，教育に貢献できると思われる。

博士論文審査の要旨

審査委員会は「博士課程の学位論文審査等に関する内規」第 15 条に基づいて博士論文等審査を下記のように実施した。

１．公開試問

公開試問は 2019 年 12 月 14 日（土）10 時 45 分より実施された。発表はパワーポイントおよび論文要旨にもとづいて行われた。次に記す博士論文の内容発表後、その内容と関連事項については質疑応答がおこなわれた。公開試問での発表は博士論文としての学術レベルを満たすものであった。質疑においても、その応答は適格であり、十分な学識が認められた。

２．審査委員会

審査委員会は、公開試問の終了後、別室において博士論文の可否を審議した。その結果、審査委員全員一致で論文内容は学位論文として価値あるものと判断し、この結果を研究科委員会に報告することとした。

３．博士論文の内容と成果

(1) 本論文の内容

レジリエンスとは、困難な出来事やストレスフルな状態を経験することにより精神的に傷ついても、それは乗り越え適応していくことができる個人の能力を指す。アレルギー疾患をもつ思春期の子どもは、病気と病気により引き起こされる二次障害によってストレス古な経験にさらされやすいことから、適応的な生活を維持するために、レジリエンスを高めることが重要である。しかし、国内においてアレルギー疾患児のレジリエンス研究は見当たらず、患児のレジリエンスを高める要因について検討する研究が必要とされていた。本研究は、まず、一般の中学生を対象に、レジリエンスに関連する要因を吟味し、子どもの適応に結びつく関連モデルの検討を行った。次に、思春期のアレルギー疾患児の語りからレジリエンスに関する内的プロセスを解明し、それを基に、思春期のアレルギー疾患児を対象に、レジリエンスを高める要因としての対人関係を中心に、実証的に検証した。

(2) 論文構成及び方法

本論文は、6 章および資料等から構成され、本文 110 頁（文字 10.5 ポイント、30 行×40 文字）から成る。

第1章　思春期にある子どものレジリエンスとアレルギー疾患の子どものレジリエンス

第2章　中学生のレジリエンスと適応との関連モデルの検討―対人関係に注目して―（研究 1）

第3章　自分を「健康でない」と認識する中学生のストレス反応に対するレジリエンスの効果（研究 2）
第4章　アレルギー疾患をもつ思春期にある子どものレジリエンスの特徴―患児の語りから―（研究 3）
第5章　アレルギー疾患をもつ思春期にある子どものレジリエンスと信頼感との関連（研究 4）
第6章　総合的考察

第 2 章および第 3 章は一般の中学生を、第 5 章はアレルギー疾患をもつ思春期の子どもを対象にした質問紙による量的研究である。第 4 章は、アレルギー疾患児の語りから、そのレジリエンスについて検討したもので、質的研究である。なお、すべての研究は、「聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会」の承認を得て実施した。

（3）成果

中学生を対象とした包括的なレジリエンス関連モデルの実証的な解明により、レジリエンス向上にあらためて対人関係の重要性が示された。また、思春期のアレルギー疾患児がもつ独特のレジリエンスの特徴を解明し、さらに質問紙調査によって、患児の重要他者としての友人や教師、看護師等への信頼感は、レジリエンスの異なる側面と関連があることを明らかにした。このようなアレルギー疾患児のレジリエンス研究は、本研究が初めての試みであり、小児看護の実践、研究、教育に貢献可能と考えられる。

試問の結果の要旨

１．公開試問

公開試問は本学 3 号館 3808 教室において 2019 年 12 月 14 日（土）10 時 45 分～11 時 45 分に実施された。研究科長の挨拶後、主査より清水氏の学位論文作成にかかわる経緯と意義について説明がなされた。審査委員会委員出席のもとに、最終発表はパワーポイントと論文要旨にもとづいて理路整然と行われた。

２．試問の方法

清水氏のよる 30 分の発表に続き、委員および出席者との質疑応答が 20 分間なされた。

内容は、①レジリエンスの定義②調査対象児の周囲に同じ病気をもつ重要他者がいることの影響③アレルギー疾患児の家族と一般の家族との違い④養護教諭との関わり等など多数の質問があり、それに対して適切に応答した。

３．試問の結果

上記公開による最終発表および試問を受けて、別室にて博士論文の可否を審議した。その結果、審査委員会は本論文内容が学位論文として価値あるものと判断し、全員一致で合格と判定した。